

2 方形竪穴遺構について (表11, 第77図)

中世の集落については、平安時代から竈を持つ竪穴住居跡が次第に減少し、居住形態は掘立柱建物に移行していったと認識されることが多かった。しかし、近年、中世集落の居住形態として方形竪穴遺構や壁支建物が注目されている。飯村均は主体となる建物の形態から、中世集落を「掘立柱建物を主体とする集落」「方形竪穴を主体とする集落」「壁支建物を主体とする集落」の3類型に分類している⁴⁾。特に、「方形竪穴を主体とする集落」については、東国特有の集落であり、溝や土塁で区画された中に、少数の掘立柱建物と方形竪穴遺構と井戸などで構成され、交通の結節点や宗教的な空間に隣接しているとする。

方形竪穴遺構⁵⁾は、広義的には「方形を基調とした竪穴の遺構」であるが、出土遺物が少なく、人為的に埋め戻されているなど、その特徴に共通点が多い反面、地域や時期によって形態の違いなどが若干認められることから、性格についても「住居」とする説や「倉」とする説、「工房」とする説などがある。ここでは、代表的な3遺跡(神奈川県由比ヶ浜中世集団墓地、茨城県の柴崎遺跡、栃木県の下古館遺跡)の方形竪穴遺構と当遺跡の方形竪穴遺構を比較検討することにする。

由比ヶ浜中世集団墓地は、道路による一定の区画の中に、方形竪穴遺構・墓壇・井戸・土坑などで構成され、600基以上(1995年当時)の方形竪穴遺構が確認されている。方形竪穴遺構は、13世紀第4四半期から14世紀後半にかけて、木組みから石組みへ変化する様相をみせている。斉木秀雄によると、5群に大別され、さらに10類型に分けられている。基本的に鎌倉幕府の倉と考えられているが、形態の違いから住居と考えられる方形竪穴遺構も存在する⁶⁾。

柴崎遺跡は、12世紀から13世紀の集落に方形竪穴遺構約90基が確認されている。これらの方形竪穴遺構は、4群に大別され、さらに6類型に分けられている⁷⁾。3時期程度の変遷の跡がみられ、2か所の柱穴・出入口・ひ処(囲い炉)を有するものが中心で、住居と考えられている。

下古館遺跡は、125基の方形竪穴遺構が確認され、集落の中に街道を取り込み、御堂や墳墓などの宗教的な空間を伴っている。時期は14世紀後半と考えられ、出入口の位置と柱穴により、11群に大別され、さらに23類型に分けられている⁸⁾。土間と床面の空間利用の違い、形態の違いなどから性格・用途には多様性があると考えられ、相関関係が想定されるような遺構配置を示す群が認められている。当遺跡とは位置的に一番近い。

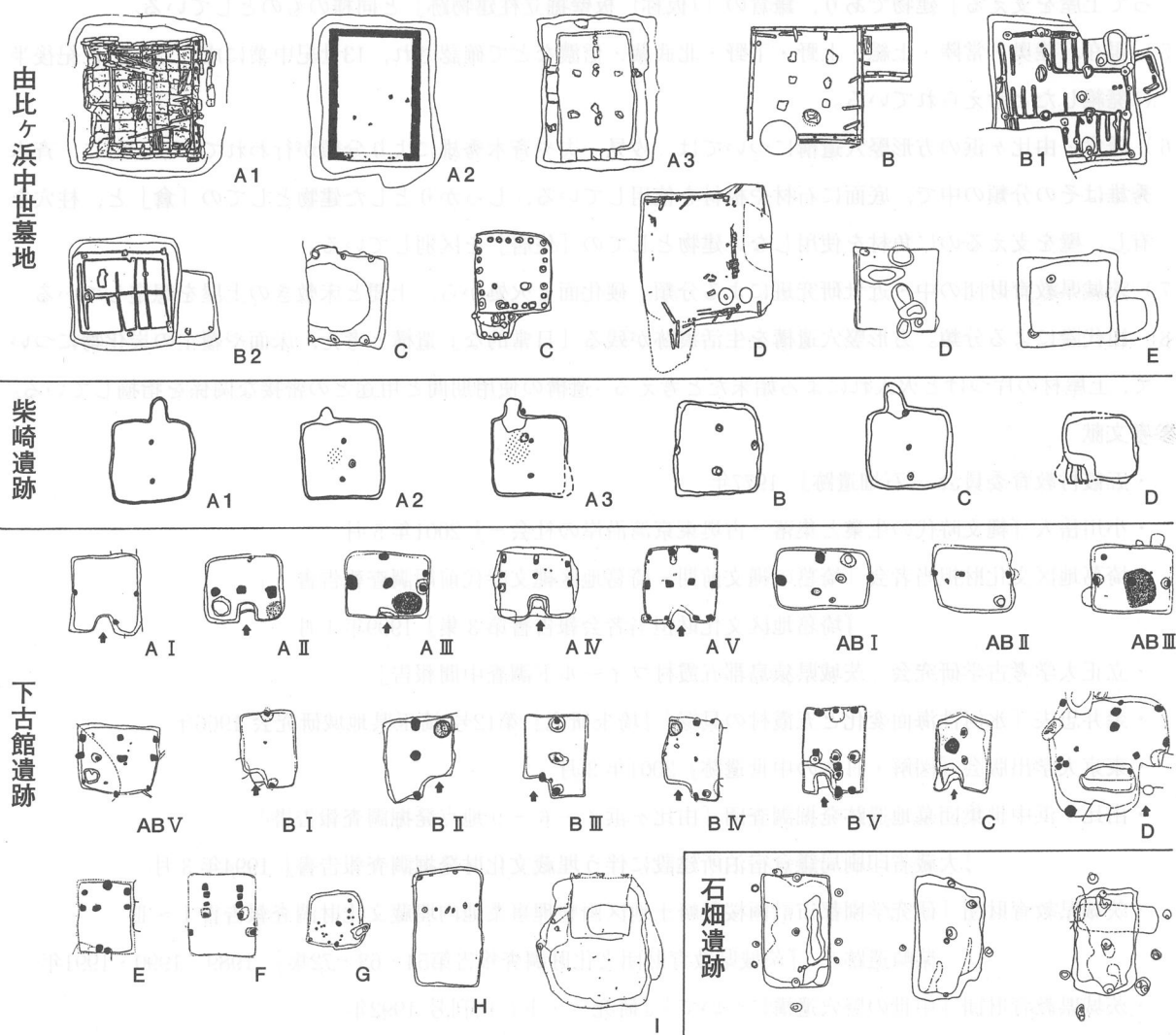
当遺跡では、平面形はすべて長方形(不整・隅丸を含む)で、出入口は71%で確認されている。柱穴はほとんど3か所で、遺構の周りにピットを伴うものが多い。炉状施設は確認されていないが、約30%に焼土が確認されている。硬化面は86%で確認され、その半分が全面硬化している。遺構の主軸は大きく2方向(南北と東西)に分かれている。出土遺物は、土師質土器、陶器常滑、硯、平瓦など、14世紀後半から15世紀後半にかけてのもので、いくつかの時期に分かれて構築されていたと考えられる。

これを3遺跡の分類に当てはめて考えると、由比ヶ浜中世集団墓地のC類、柴崎遺跡のC類、下古館遺跡のB類・AB類と類似していることが分かる。特に、下古館遺跡のBⅡ・BⅢ・ABⅡ類とはほぼ同類である。ちなみに14基中、BⅡ類8基、BⅢ類2基、ABⅡ類2基、遺構の半分以上が調査区域外で、平面形が不明なもの2基である。(ただし、外周ピットについては当遺跡の特徴としてとらえた。)また、3遺跡と大きく異なる点は、バリエーションがないことである。3遺跡の分類は同一観点で分類されているわけではないが、当遺跡の方形竪穴遺構は3遺跡の分類の中でもそれぞれ1つのタイプにしか当てはまらない点が注目される。

このことから、当遺跡の方形竪穴遺構は、下古館遺跡とのつながりを強く感じる一方、下古館遺跡の集落よりも、限定された集落と考えることができる。集団としての生活の場所で、効率的・機能的に遺構が配置されており、住居の可能性が考えられるが、特定の職人層・身分層の仕事の場、「工房」の可能性も否定できない。

表11 方形竪穴遺構の比較

項目 \ 遺跡	石 畑 遺 跡	由比ヶ浜中世集団墓地	柴 崎 遺 跡	下 古 館 遺 跡
形 状	長方形	長方形・方形	方 形	長方形・方形
出 入 口	張り出し・階段状	スロープ状・階段状	スロープ状	張り出し・階段状・スロープ
柱 穴	86%が主柱穴3か所	6か所・壁直下に柱穴などさまざま	83%が主柱穴2か所	86%で柱穴(32%が2・3か所)
炉 状 施 設	確認なし	確認なし	約14%に火処	14%で確認
床 面	86%が硬化(内50%全面)	木材・石材・土間	半面硬化	硬化面なし
主な出土遺物	土師質土器(播鉢)・常滑(甕・片口鉢)・硯・平瓦	土師質土器, 瀬戸灰釉折縁鉢, 灰釉碗	土師質土器(小皿)・常滑(壺)・青磁(碗)・渡来銭・鉄鎌	土師質土器, 陶器, 産地不明土器(火鉢)
その他の特徴	外周ピットを持つ	「倉」と「住居」	小規模, 「住居」	主軸方向は道路に関係



第77図 方形竪穴遺構の分類

註

- 1) 小川岳人は、縄文前期によくみられる住居の再利用について、「拡張・立て直し」行為を、「反復」という言葉で総括し、規模的・時間的・効率的な視点から、前期の奥東京湾周辺集落について論じている。
- 2) 五霞町の貝塚では、戦前（1933年）に史前学研究所（大山柏ら）の分布調査が行われ、江坂輝弥の論文（1954年）や和島誠一らの研究（1968年）に取り上げられている。また、埼玉県立不動岡高校の社会クラブ（金井忠夫）による発掘（1962～1965年）、立正大学考古学研究会によるフィールド調査（1969・1970・1973年）が実施されている。
- 3) 和島誠一らは「関東平野に於ける縄文海進の最高水準について」（1968年）の中で、茨城県五霞町・神栖町、埼玉県入間郡、神奈川県横浜市などのボーリング調査を行い、珪藻化石分析の結果、海成層頂面高度は0～3.5mであることを立証し、海面10m説を否定した。
- 4) 「掘立柱建物を主体とする集落」については、「掘立柱建物の母屋、付属屋、倉庫、工房、井戸などに方形堅穴の倉庫・工房が伴う」集落で、階級の差によって規模に違いがあり、畿内と東国では同様であるとする。「壁支建物を主体とする集落」については、14世紀初頭の例として、新潟県馬場屋敷遺跡下層遺構があげられている。また、「壁支建物」とは、「浅く堅穴に掘り込んだ地中から板壁を立ち上げていく構造で、壁によって上屋を支える」建物であり、鎌倉の「(仮称)板壁掘立柱建物跡」と同様のものとしている。
- 5) 現在、陸奥・常陸・上総・上野・下野・北武蔵・信濃などで確認され、13世紀中葉に成立し、15世紀後半に廃絶したと考えられている。
- 6) 鎌倉・由比ヶ浜の方形堅穴遺構については、汐見一夫や斉木秀雄により分類が行われている。特に、斉木秀雄はその分類の中で、底面に石材や板材を使用している、しっかりとした建物としての「倉」と、柱穴を有し、壁を支えるのに角材を使用しない建物としての「住居」を区別している。
- 7) 茨城県教育財団の中・近世研究班による分類。硬化面と火処から、土間と床敷きの上屋を想定している。
- 8) 田代隆による分類。方形堅穴遺構を生活痕跡が残る「日常的な」遺構と考え、床面や覆土の炭化物について、上屋根材の片づけと火入れによる始末だと考える。遺構の使用期間と用途との密接な関係を指摘している。

参考文献

- ・五霞村教育委員会『石畑遺跡』1977年
- ・小川岳人『縄文時代の生業と集落－古奥東京湾沿岸の社会－』2001年5月
- ・埼玉葛地区文化財担当者会「埼玉葛の縄文前期－埼玉葛地区縄文時代前期調査報告書－」
『埼玉葛地区文化財担当者会報告書第3集』1999年1月
- ・立正大学考古学研究会「茨城県猿島郡五霞村フィールド調査中間報告」
- ・金井忠夫「氷河性海面変化と五霞村の貝塚」『埼玉研究』第12号 埼玉県地域研究会 1966年
- ・東京大学出版会『図解・日本の中世遺跡』2001年3月
- ・由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団「由比ヶ浜4－6－9地点発掘調査報告書」
『大蔵省印刷局鎌倉宿泊所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1994年3月
- ・茨城県教育財団「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ～Ⅲ
柴崎遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第54・63・72集』1989・1990・1991年
- ・茨城県教育財団「中世の堅穴遺構について」『研究ノート』創刊号 1992年
- ・栃木県教育委員会（財）栃木県文化振興事業団「下古館遺跡」『－住宅・都市整備公団小山・栃木都市計画事業自治医科大学周辺地区埋蔵文化財発掘調査－』1995年3月